

では、これより「エホバの証人へ」というタイトルで皆さんにお届けしたいと思います。“エホバの証人”、“ものみの塔”とも言います。英語では Jehovah's Witnesses、JW と略称して呼ぶことも多いです。前回まで私たちは『聖書 66 巻の中のキリスト』について学んできました。ヨハネの福音書 5 章 39 節にも「聖書すべてはわたしについて証言しているのだ。」とイエス・キリストご自身もそうおっしゃっています。ですから聖書はイエス・キリストの証言集と言って良いと思います。

で、エホバの証人の人たちはイエス・キリストをどのように捉えているのでしょうか。彼らも「イエス・キリストを信じています。」と、そう断言します。で、自らクリスチャンであると自称します。しかしそれは私たちが信じているという信仰の幅と内容と全く異なっております。彼らにとってのイエス・キリストは神ではありません。彼らの神はエホバのみです。全能の神、それはエホバだけであって、イエスは神ではない。じゃあ、イエスは何であるのか。イエスは神の子であって、神の子は神に造られたもの。もっと具体的に言いますと、イエス・キリストは神に造られた御使いの 1 人、天使の 1 人。そしてその名をミカエルと言います。ミカエルと言うのは天使長、あるいは大天使ミカエルと有名な御使いです。聖書に当然出てきます。そのミカエルが人の姿をとって受肉してこの世に来たのが、イエスという者であって、そのイエスが私たちの罪を負って、そして父の御心に従って十字架に掛かって死なれて、そして葬られて、3 日目に甦られた。そのイエスを彼らは信じているというわけです。しかし聖書はこのイエスについて証言しているわけです。イエスは聖書によればミカエルではありません。イエスは神の御子であり、子なる神であり、その方が人の姿をとってこの世に来て、そして私たちの罪を負って十字架の上で死なれ、葬られ、三日目に甦られたのであります。100%神であり 100%人であります。ユニークな神と人との間の唯一の仲介者、唯一の救い主であります。そして三位一体なる神の第二位格とも言われます。第一位格が父なる神、第二位格が子なる神イエス・キリスト、そして第三位格が聖霊なる神。『三位一体』という言葉は聖書にありません。エホバの証人はそこを突いてきます。「『三位一体』なんて言葉は聖書に使われていないのに、そんな 3 人の神を信じる多神教は非聖書的であって、おかしい。むしろ神はただ 1 人であるとしか聖書に書いていない。そのただひとりの神こそエホバの神、全能の神であって、イエスは神ではない。むしろイエスを神とする事はエホバへの冒瀆である。」と、そう彼らは考えるのであります。

でも、そのイエスが聖書の中では、「聖書 66 巻、神の言葉はすべてわたしについて証言している。」とおっしゃるわけです。イエスがただの御使いだったら、「聖書のテーマは御使いです、天使です。」という話になるわけです。私たちはそんなものを大事にしているわけではありません。御使いに関する本を最高権威の神の言葉として受け止めるわけにはいきません。なぜ聖書が最高権威の書物かと言えば、それは最高権威者である、神であるイエス・キリストについて証言する神の言葉であるからです。ただの人間であったり、ただの御使いであったら、そんなものを書く本なんていうのは、世の中に五万とあるわけです。いくらでもそんな神話はその辺に転がっているわけです。でも聖書は、唯一無二のお方、他に比べうることのないお方、絶対的な方、イエス・キリストについての証言集ですから、これはもう他の書物とは訳が違うわけです。そのことを『聖書 66 巻のキリスト』というテーマで、ずっと私たちは学んできました。その流れも皆さんにも汲んで頂きながら、敢えて今日のメッセージのタイトルは『エホバの証人へ』と言いましたけれども、前回のパート 2 と言ってもいいかもしれません。実際に今から話すテーマもイエス・キリストであります。

で、『エホバの証人』というその名称ですが、これはイザヤ 43 : 10 から取られております。そこをまず

皆さんに聞いて頂きたいと思います。『あなたがたはわたしの証人、—主の御告げ。（太字の主ですから神の個人名、ヤーウェと言います。文語訳ではエホバであります。で、エホバの証人もこの太字の主をエホバと表記します。）—わたしが選んだわたしのしもべである。これは、あなたがたが知って、わたしを信じ、わたしがその者であることを悟るためだ。わたしより先に造られた神はなく、わたしより後にもない。』“あなたがたはわたしの証人”ここからエホバの証人という言葉がとられています。

参考までに彼らの使っている聖書、それは新世界訳聖書と言います。今私の手元にあります。見た目はそっくりです。で、その訳ですと『「あなた方はわたしの証人である」と、エホバはお告げになる、「すなわち、わたしが選んだわたしの僕である。それはあなた方が知って、わたしに信仰を抱くためであり、わたしが同じ者であることを理解するためである。わたしの前に形造られた神はなく、わたしの後にもやはりいなかった。』ほぼ同じような訳になっていると思いますが、興味深いことに新改訳で『わたしがその者であることを悟るためだ。』の“わたしがその者である”というフレーズ、これは実はヤーウェという神の名前の由来である「わたしはあるものである」というフレーズです。それは出エジプト記3章のところで、柴の箇所として有名なところです。燃える柴、燃え尽きない柴の中から“主の使い”が、それこそが受肉前のキリストであると皆さんにはお伝えしましたがけれども、モーセが神様の名前を問うたわけです。そうしたら主の使いが「わたしはあるというものである」と。これはヘブル語では「エフィエ・アシェル・エフィエ」と言います。それが神の個人名です。「わたしはあるというものである」その言葉がイザヤ43:10の“わたしがその者である”と。新世界訳聖書では“わたしが同じ者である”と訳出していますが、そこは神が個人名を明かされた場面です。で、これをギリシャ語では「エゴー・エイミー」と言います。有名ですね。で、『わたしより先に造られた神はなく、わたしより後にもない。』ということは、「私はただひとりである。唯一だ。」ということをおっしゃっているわけです。確かに聖書では、神と呼ばれているお方は唯一のお方です。

しかし、実はエホバの証人は自ら矛盾したことを言うのです。確かにエホバという神は1人しかいない。でも他にも神はいるのだと。その他ほかの神というのがイエス・キリストなのです。彼らも「イエス・キリストは神だ。」と言うのです。これはそう言わざるを得ないのです。というのは、聖書にイエスが神だということは、そこかしこに書いてあるので、一応神と言うんです。でも、それは全能の神ではない別の神であると。全能の神に劣る神であると。「じゃあ、エホバの証人というのは多神教なんですか。」と、そう言われても仕方がないというほど、彼らは矛盾を抱えているんです。自分たちは唯一神教であると、唯一神の信仰を持っている者だと、誇っているんですが、でも「イエス・キリストも神だ。」と言うんです。でもイエスはエホバではないと。エホバと同じ神ではない。神はただひとりなので、イエスは神ではないと。ではなんですか。御使いです。でも御使いが神だと言うんです。もうその時点で皆さんも混乱していると思うんですが、彼らも混乱しているんです。

で、他にも参考までにキリスト教系の異端でモルモン教というものがあります。末日聖徒イエス・キリスト教会と言う正式名がありますが、モルモン経という聖書プラスアルファの経典を持っているので、そこからモルモン教ともよく言われます。モルモン教徒になりますとそれぞれが神になります。ですからモルモン教というのは多神教です。イエス・キリストも神なんです。でも、モルモン信者も神なんです。モルモン教によればイエスは御使いであって、ルシファーの兄であると。ルシファーというのがイザヤ14章に出てくる『暁の子、明けの明星』と呼ばれる天使で、天国では聖歌隊のリーダーを務めていた大変地位の高い御使いだったわけです。でも、そのルシファーがいと高き方のようになりたいたして高慢になって、そして神にとって代わろうとした故に、彼は地に落とされるわけです。でも、そのルシファーに追随して、御使いの全体の3分の1も付いて行って墮落したわけです。で、そのルシファーが後のサタンとなります。悪魔と呼ばれます。で、そのサタン・悪魔に追従した御使いたち、墮天使たちは悪霊となっていきます。

そのルシファーのお兄さんがイエスだというのがモルモン教の教えです。でも、モルモン教でもイエスは神だと言います。完全にモルモン教の場合は多神教と言って良いかと思えます。

で、話を戻したいと思いますが、エホバの証人というのはこの**イザヤ 43 : 10** から取られたと言いました。1931年のことです。2代目会長のジョセフ・ラサフォードという人がこのエホバの証人という言葉を使い始めたわけですが、それ以前1代目のいわゆる創始者が1881年に『シオンのものみの塔冊子協会』というのを始めたわけです。チャールズ・ラッセルというのが創始者です。彼は牧師と呼ばれていました。彼の墓にも墓碑が刻まれていて、**Pastor Charles Russell** と。Pastor とは英語で牧師を意味します。で、現在エホバの証人で牧師と呼ばれる人はいません。でもチャールズ・ラッセルだけは牧師と呼ばれているんです。

今は『ものみの塔聖書冊子協会』という正式名があります。で、通称『エホバの証人』。エホバの証人ともものみの塔は同じであります。別だと考えている人も、誤解している人もありますけれども、全く同じです。同じ組織です。

で、同じく**イザヤ 42 : 8**『わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。』“わたしは主”というところに*印が付いていて、新改訳聖書ですと欄外に「ヤーウェ」「エホバ」ともなっています。同じ事なんですが、「エホバ」というのはおそらく誤読だろうと言われています。間違った読み方です。と言うのは、聖書の中に新改訳聖書ですと“ヤハ”というような“ヤーウェ”の短縮形が出てきます。で、また“ハレルヤ”の“ヤ”も“ヤーウェ”の“ヤ”から来ています。“ハレル”と“ヤ”という言葉。“ハレル”というのは「天気が晴れる」と全く同じ意味です。太陽が照り輝く、晴れる。冗談で言っているのではありません。本当に「輝く」という意味です。で、その“ヤ”、ヤーウェが輝く。それを転じて、ヤーウェが輝き出るように。ヤーウェが誉め称えられるように。ヤーウェが賛美されますように。で、これを命令形になっていますので、ハレルヤの場合は、「ヤーウェを賛美せよ。」と、特に複数の人たちに対して「あなた方はヤーウェを賛美しなさい」という、これがハレルヤの厳密な意味であります。ですから、“ハレルエ”ではないですね。“ハレルヤ”であります。で、読み方は実際に聖書に正確に記されていないので、本当に“ヤーウェ”と読むかどうかとも正確には言い切れないところがありますが、“エホバ”でないことは確かなようです。

で、今読んだ**イザヤ 42 : 8**によっても、エホバはひとりだということが明確に謳^{うた}われております。彼らの、エホバの証人の新世界訳聖書ではこのように訳しています。『**「わたしはエホバである。それがわたしの名である。わたしはわたしの栄光をほかのだれにも与えず、わたしの賛美を彫像に与えることもしない。」**』ここも大体新改訳聖書と似たような訳になっています。ですから彼らは、エホバはただひとりだと。イエスは神ではないと言いながらも、エホバに劣る別の神だという矛盾したような言い方もしています。

で、それを踏まえて今から「エホバの証人へ」ということで、聖書を通して彼らの信仰に迫りたいと思います。そして彼らの矛盾にも指摘をしていきたいと思しますので、**イザヤ書**の方からいくつもの聖句を皆さんに今から開いて頂きます。で、これはエホバの証人のスタイルそのものと思ってください。彼らと話すと思分かります。彼らは聖書をもってあちこちから聖句を引っ張ってきます。でもそれはマニュアル通り、教えられた通り、決まった聖句があるんです。その他の聖句を問われると彼らは答えられませんから、驚かないで下さい。彼らはいろんな聖句を引っ張ってきて、よほど聖書を普段から読んでるんだなと思ったら大間違いです。決まった聖句をあちこちから引っ張れるように訓練を受けているだけです。でもそのスタイルは彼らに合っているの、私は彼らのスタイルに合わせて聖書を使って彼らと論ずるということをしてきました。

で、まずは**イザヤ 48 : 12** から始めます。私たちの使っている新改訳聖書、或いはプロテスタントでは公同の聖書として新共同訳聖書とか口語訳聖書というのがありますけれども、私たちの場合は新改訳聖書

を使っています。福音派の教会では新改訳聖書を主に使います。新共同訳聖書というのは口語訳聖書のリニューアルしたバージョンです。口語訳が古い訳で、それを新しくしたのが新共同訳聖書で、新共同というのはその名の通りカトリックとプロテスタントが共同で訳したというものです。ですから日本では最も普及している聖書、それは新共同訳聖書です。主に主流派と呼ばれるプロテスタントのグループが使っています。日本基督教団を始めルーテルとか昔からある伝統的な教派教会では、この新共同訳聖書を採用しております。で、新改訳聖書を使っているのは福音派と呼ばれているグループです。でもまだ昔からの口語訳がいいと言って口語訳を引き続き使っている教会も少なくありません。でも、口語訳がリニューアルされた所以^{ゆえん}というのは、実はそこに問題があったからです。口語訳の訳に問題があったので、新共同訳が生まれて、そして新改訳もそこから生まれたんです。ですから最初は皆口語訳しか使ってなかったんです。でも口語訳の前は文語訳聖書です。文語訳では少し難しいので、口語訳、普段の言葉でこれを砕いて訳しましょうと。ただその口語訳にはいろんな致命的な訳のミスがありましたので、それを新共同訳聖書と新改訳聖書がそれぞれ訂正して作られてきました。^{たもと}袂を分かっていくのは、新共同訳聖書は、これはエキュメニカル運動という世界教会合同運動という形で、プロテスタントとカトリックが融合して、他の宗教も皆1つになっていこう、神という呼び名は別でも皆1つになっていこうと。人類はひとつ、宗教もひとつ、そうすれば戦争もなくなるじゃないかと。そういう動きがその向こうにあるわけです。で、それはおかしいと。そんないくつもの宗教が一体化するというのはいえなことで、そもそもプロテスタントというグループはカトリックの教義が聖書的でないから、そこに抗議して、プロテストして生まれてきたのに、何故今更ルターを全否定してまで、またカトリックと融合していくのかと。おかしいじゃないかというのが福音派です。で、彼らは新改訳という独自の聖書を編纂していくようになるわけです。まあそれはそれで置いておきまして、エホバの証人も独自の聖書を持っています。それは彼らの教義に合わせた新世界訳聖書というものです。ですから、新共同訳はプロテスタント、カトリック両方に配慮した訳となっています。で、新改訳は福音派という人たち、つまり聖書を文字通り神の言葉と信じきっている人たちが直訳的に、逐語的に訳したものです。ですから読みやすさから言うと、新共同訳聖書の方が読みやすいです。ただ訳の忠実さからいうと、どちらかというとなら新改訳の方に分があるように思います。かといって新改訳がすべて正しいと言えば、そうでもありません。新共同訳聖書の訳の方が良いという場合もあったりして、皆さんにはそのような紹介の仕方しております。でもまあ、全体的に言うと新改訳の方が原語に忠実だという点から、私はこの教会で新改訳を採用しているだけであります。他にもっといい訳があれば当然それ以外の訳を使っていると思うんですけども。

で、新世界訳聖書はエホバの証人の教理に合わせた、これは私的解釈の施された、もはや改ざんされた聖書と言っていいと思います。でも、彼らはそれを信じきっていますので、それ以外の訳がおかしいと思っ込んでいますから、私は彼らの聖書を使いながら彼らの信仰の矛盾点に迫っていくというスタイルをとっております。

で、イザヤ 48 : 12 『わたしに聞け。ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしは初めであり、また、終わりである。』“わたしがそれだ”というところにも*印が新改訳はついています。欄外には、あるいは「わたしは同じだ」または「わたしは変わらない」とありますけれども、これも「わたしはあるというものである」という「エフィエ・アシェル・エフィエ」、ギリシャ語では「エゴ・エイミー」と訳されるところです。旧約聖書のギリシャ語訳聖書セプトゥアギンタ若しくは 70 人訳聖書、70 人の人が訳した聖書によれば、ここは「エゴ・エイミー」になっています。でも当然、その“わたしがそれだ”「わたしはあるというものである」『わたしは初めであり、また、終わりである。』と言っているのは、これは父なる神、主なる神。エホバの証人によればエホバ自身だというふうに解するわけです。

で、新世界訳聖書はこう訳しています。イザヤ 48 : 12 『「ヤコブよ、わたしが呼んだ者イスラエルよ、

あなたはわたしに聴け。わたしは同じ者である。わたしは最初である。しかも、わたしは最後である。』と。まあ、ここもそれほど大差はない訳となっております。

で、私はここで確認をとるわけです。「これはどなたのことをおっしゃってるんですか。」と、そうすると彼らは「これはエホバです。」と。「全能なる神エホバです。」と明言してくれます。

で、イザヤ 44 章 6 節に進みます。『イスラエルの王である主（ヤーウェ或いはエホバ）、これを贖う方、万軍の主（これも太字の主です。）はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。』

で、これも新世界訳聖書で読みますとこうなります。『「イスラエルの王、これを買い戻す方（買い戻すというのが“購う”というところです。）、万軍のエホバ、エホバはこのように言われた。『わたしは最初であり、わたしは最後であり、わたしのほかに神はいない。』これはもう聞くまでもなく、誰のことを言っているかと言うと、エホバです。そしてエホバ以外には神はいないと明言されています。

で、しっかり確認をとるわけですが、ただ「イスラエルの王」というのがエホバであるというところは見落としてはいけないポイントであります。というのは、新約聖書のヨハネの福音書 1:49 によれば、イエスは「イスラエルの王」と呼ばれています。でも、イスラエルの王はただひとりであるはずですが、イスラエルの王は、エホバ唯お一人であるはずなんですね。でも、別にイスラエルの王がいると。そこに矛盾があるわけです。まあ、それはその時には触れません。皆さんはそのことを心に留めておいていただいて、次に 3 番目の箇所、イザヤ 41:4 『だれが、これを成し遂げたのか。初めから代々の人々に呼びかけた者ではないか。わたし、主こそ（ヤーウェこそ）初めであり、また終わりとともにある。わたしがそれだ。』この『わたしがそれだ。』これも「エゴ・エイミー」です。「わたしはあるというものである」と。

新世界訳聖書では『だれが活動し、これを行ない、始めから代々の人々を呼び出したのか。「わたし、エホバは、第一なる者であり、最後の者たちに対しても同じ者である。』と。これもエホバとはっきり言っています。新改訳聖書ではイザヤ 41:4 の『また終わりとともにある。』と。『わたしがそれだ。』と。この「エゴ・エイミー」というところを、今繰り返し繰り返し皆さんに強調して伝えておりますけども、これはエホバの証人に言わせても当然エホバそのものを指している。父なる神を指しているという表現です。

で、もう皆さんには言うまでもないことですが、『わたしがそれだ。』「わたしはあるというものである」「エゴ・エイミー」と宣言されているのは、父なる神だけではないということを皆さんは新約聖書の中で知っているはずなので、まあそれはこの時点では敢えて口に出さずに心に留めて、まだそのことを明かさずに進めていきます。

で、4 番目に今度は新約聖書の方に目を移します。黙示録です。この黙示録は新世界訳聖書では『啓示の書』と言います。『ヨハネへの啓示』と言います。黙示と啓示、似たような言葉なので大差はありません。実際に啓示の方が分かりやすいと思います。黙示の方が分かりづらいと思います。まあ、黙示、啓示というのはギリシャ語ではアポカリュプシスと言って、それは「ベールを上げる」ということです。あるいは「暴露する」という意味であります。何を暴露するのか。ヨハネの黙示録 1:1 これは参考までに言うだけですけれども『イエス・キリストの黙示』。で、新世界訳聖書は「イエス・キリストによる啓示」となっていますが、その黙示、啓示という言葉はアポカリュプシスです。このアポカリュプシスという言葉は、ですからイエス・キリストを暴くものです。イエス・キリストの実体を暴くもの、イエス・キリストの本性を暴くもの。悪い意味で言っているのではなくて、イエスが本当にどんな方かを証明するため。ベールがかかっていたような分かりにくさを全て取り退けて、もう間近にありのままに本当のイエス・キリストの姿を見せる書物が、この黙示録と呼ばれる書物です。或はエホバの証人の言うところの「啓示の書」であります。で、その中からまず 1 章 8 節を、イザヤの続きで彼らに伝えていくわけです。黙示録 1:8 『神で

ある主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」』新約聖書は旧約聖書と違ひまして、太字の主はありません。普通字の主です。で、新約聖書における普通字の主というのは、ギリシャ語でクーリオスと言います。或いはキュリオスと言います。旧約聖書の方の普通字の主もあるんです。そちらはアドナイと言います。太字の主がヤーウェ、或いはエホバ。で、旧約の普通字の主は、アドナイ。で、アドナイというのは、神だけでなく、人間の主にも使われます。主人と言う時に使います。アブラハムの妻サラもアブラハムのことをアドナイと呼ぶわけです。主、日本人も妻は夫のことを主人と言います。まあ、それをヘブル語に直せばアドナイと言うわけです。雇用主とか、そういった言葉も全部アドナイを使うんですが、それはヘブル語の話です。

で、新約聖書のクーリオスというのは、これは最高権威を表す称号なんですけれども、これは旧約聖書のヤーウェもクーリオスと訳します。で、同時に人間の最高権者もクーリオスと訳します。特に新約聖書時代クーリオスと呼ばれたのは、ローマ皇帝であります。で、このクーリオスは主イエス・キリストにも使われています。で、勿論父なる神にも使われていますし、聖霊なる神にも使われています。でも、エホバの証人はこのクーリオスを全てエホバと訳しています。で、場合によってはそのクーリオスがイエスに使われていることもあるので、イエスの場合は、イエスに使われている場合は、これはエホバと訳すわけにはいかないわけです。彼らはイエスがエホバだとは信じていませんので、その場合は新世界訳聖書では、単純に『主』と訳しています。ですから彼らは自分たちの都合に合わせて、『エホバ』と『主』というのを訳し分けているんです。でも実際には原語は全部クーリオスに統一されています。それがギリシャ語の原語です。でもエホバの証人はそれを敢えて、訳し分けているんです。クーリオスをわざわざエホバと置き換えたり、それを単純に『主』と訳したりしているわけです。

で、ちなみに**黙示録 1:8**には、(彼らにしてみたら『**啓示の書**』です。) こうあります。『**エホバ神はこう言われる。**(新改訳では『**神である主**』となっています。『**エホバ神はこう言われる。**』これが新世界訳。)**「わたしはアルファであり、オメガである。今おり、かつており、これから来る者、全能者である。」**』ですから新世界訳聖書では、**黙示録 1:8**、**啓示の書 1:8**は、明らかに**エホバ神**と、そのように明確に訳しています。「これはエホバがおっしゃっていることだ。」と。

で、参考までに別にもいろんな訳がありまして、そのいろんな訳と言うのは、写本が異なるものによって訳があるわけです。で、興味深いことに新世界訳聖書と新改訳聖書ならびに公同の聖書としてプロテスタントが採用している新共同訳とか口語訳も大体ベースにしている写本は同じであります。そこが問題にもなるんですけれども、それとは全く一線を画して別の写本群を使っている聖書があります。で、それは英語の聖書の中で 1 番分かりやすいのは欽定訳聖書という最も伝統的な権威ある聖書です。King James version です。で、その新しい訳のものが新欽定訳聖書、New King James version というものです。で、その欽定訳聖書がベースにしている写本というのは、公認本文と呼ばれるものです。Majority text と言います。majority と言うくらいですから、多数あるわけです。ですから新約聖書のギリシャ語の最も写本数が多いもの、それが公認本文というもので、その数が多いので最も普及していた写本だということです。その理由からその普及していた写本が原本に一番近いものだろうと、そう信じられてきたわけです。ところがその公認本文よりも歴史の古い、歴史の若い一部の数限られた少数の写本が発見されてきたわけです。で、それは大多数の majority text と呼ばれている公認本文とは、写本の内容に違いがあったりして、そこで「時代の古いものは、数は少ないけれども原本に一番近いのではないかと、そちらの方がですから原本に近い。」というそういう捉え方と、「否そうではない、数が少ないと言う事はそれほど普及していなかったが故であって、古ければ原本に一番近いというのはこれは短絡的すぎる。」と。「むしろ数が多い方が当時最も受け入れられていたという証明であって、古いものが残ると言うことは、あまり使われていなかったという証拠である。」と。よく使われていればどんどん磨耗していくわけです。消耗品ですから当然皆さ

んの聖書もそうですけれども、読めば読むほどそれはほころびてきて、だんだん読める代物ではなくなるわけです。で、その都度新しく印刷されるように、写本がどんどん新しくリニューアルされていくわけです。だから公認本文というのは当然新しくなっていくべきものです。でも古いまま残っているというのは、ほとんど手がつけられていない、読まれていない。それは原本からすると大分変更が加えられてしまっている。多くの物は改ざんの痕が明らかにあるというようなものであります。で、今そういう難しい話をしたいわけではないのですが、残念なことに新世界訳聖書と新改訳とか新共同訳また口語訳というのは、その古い写本こそ原本に一番近いものであるという立場の写本を使っています。ネストレ版と呼ばれるものです。これは皆さんの新改訳聖書の一番後ろの方を開いて頂くと解説が載っています。どういう写本を使っているのかと。だいたい似たり寄つたりのものを新世界訳も、エホバの証人も採用しているんです。だから似たような訳になるのは当然なんです。でもそれとは全く違って公認本文というのは、これは King James version 欽定訳とか、New King James version 新欽定訳に使われているものなので、こちらの方がもし日本語訳で普及するならば、私は是非そちらを教会では使いたいと思っています。かつて文語訳聖書では、日本語の文語訳聖書ではこの公認本文を使った訳が存在しました。でも今はありません。でも、一部のグループがこの公認本文をベースとした日本語訳聖書の作成をしている最中です。特にカリスマ派と呼ばれている人たちが作っているの、それはそれでちょっと悩みどころなんですけれども、でもその訳が出来たら是非私も読みたいと思いますし、それが本当に優れたものであれば、日本で是非普及して欲しいと思うものであります。というのは、それがより原本に近いと私は確信しているからです。

で、そんな話を今、長々とするわけにはいかないんですが、黙示録 1:8 のその公認本文の写本の方には、それには実は次の言葉が加えられています。「わたしはアルファであり、オメガであり、最初であり、最後であるその方が、神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者である。」と。ですからここで順番としては「わたしはアルファであり、オメガであり、最初であり、最後である方が、神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者である。」という言い方で、その続きがずっとアルファでありオメガである方が続けて語っていくという内容となっていくと思います。

で、黙示録 4:8 に今度は目を移してください。ここもエホバの証人の人にこの順番で提示していきます。『この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。』」で、これもどなたですかと質問すれば、当然彼らは「これはエホバの神である。」と、全能の神だとそう即答します。で、新世界訳聖書もこのように訳しています。「また、その四つの生き物は、その各々にそれぞれ六つの翼があり、周りも下側も目でいっぱいである。そして彼らは昼も夜も休むことなくこう言う。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者なるエホバ神、かつておられ、今おられ、これから来られる方。』」

で、また 1 章に戻るわけです。1 章 11 節。『その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。』」そして新世界訳も併せて読みます。「あなたが見ることを巻き物に書き、それを、エフェソス、スミルナ、ペルガモン、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤにある、七つの会衆に送りなさい。」ここで誰がこの言葉を語っているのかと。7つの教会、新世界訳では7つの会衆と言っています。まあ、同じことなんです、彼らは教会という言葉を使いません。会衆という言葉を使います。で、そのとにかく七つの教会なり会衆に書き送った、手紙を書き送るんですが、まあその巻き物の送り主は誰なのか。或いはこれを語っている声の主は誰なのか。まあそれを質問したら、当然彼らは「エホバである。」と、迷うことなくそう答えます。

そして黙示録 21 章 6 節。『また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。」

最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。』啓示の書 21:6 でも「そして、その方はわたしに言われた、「事は成った！ わたしはアルファでありオメガであり、初めであり終わりである。だれでも渇いている者に、わたしは命の水の泉から価なしに与える。」と。で、これも「どなたですか。」と言えば、当然「エホバです。」と彼らは答えます。もうさっきからアルファでありオメガであるとか、もう何度となくエホバの神がそうおっしゃっているという事を繰り返し繰り返し読んできたばかりですから、もう迷うことなくそう言えるわけです。

で、22章13節。『わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。』新世界訳も同じように「わたしはアルファでありオメガであり、最初であり最後であり、初めであり終わりである。」と。この“わたし”とは誰ですかと。エホバですよ。

ただその前の12節を見て頂くと『見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。』その“わたしはすぐに来る”と言う方が「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」と、そうおっしゃっているわけです。この12節の「わたしはすぐに来ると言う方はどなたですか。」と答えると、彼らは困るので、ここではつつこみません。まだエホバのままでいてもらいます。

で、その後に1章に戻って頂きます。1章17節～18節。『¹⁷それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。(私と言っているのは使徒ヨハネです。ヨハネがこの方を見たときに、足もとに倒れて死者のようになった。)しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、¹⁸生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。』「これはどなたのことですか。」「エホバです。」と彼らは言うと思いますが、「エホバは死んだのですか。」となるとちょっと困るわけです。で、啓示の書の方では「¹⁷それで、彼を見た時、わたしは死んだようになってその足もとに倒れた。すると彼は右手をわたしの上に置いて、こう言った。「恐れてはいけない。わたしは最初であり最後であり、(ここまでであればエホバでいいわけです。) ¹⁸また、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、限りなく永久に生きており、死とハデスのかぎを持っている。」エホバが死んだなどということは、聖書のどこにも書いてないわけです。まあ、いわゆる父なる神は死んだという、そういう記述は彼らの聖書にもどこにもないわけです。でもここにははっきり“死んだ”とあります。そこで彼らは大分行き詰まってきます。

で、参考までにこれは専門的な知識となりますけれども、エホバの証人が発行している冊子『目覚めよ』というのがあるんですが、皆さんも受け取ったことがあるかもしれません。戸別訪問でピンポンしてきて、『目覚めよ』雑誌です。その1978年11月22日版では、さっき開いた黙示録22章13節、これは彼らに敢えてこの時は指摘しませんけれども、「わたしはアルファでありオメガであり、最初であり最後であり、初めであり終わりである。」これは全能の神エホバだと、その『目覚めよ』という機関誌の中にはそう解説されています。ところが翌年の1979年の1月1日の『目覚めよ』版には、この黙示録22章13節の。“わたし”これはイエス・キリストであると。なぜかというとその前の12節には、「見よ、わたしは速やかに来る。」と。速やかに来る方はイエス・キリストだから、13節の“わたし”はイエス・キリストであって、イエスがアルファでありオメガである。最初であり最後である。初めであり終わりであると。1979年のその『目覚めよ』にはそう書いてあるんです。1年でころっと内容が変わるわけです。解釈が変わるわけです。で、もちろん今はまたエホバになっているわけです。これがイエスでは全く困ってしまうので。

でも、実際に普通に小学生でも、国語の授業で本来主語が誰を指しているのか、述語が何なのか、そうやって単純に読解しようとすれば、もう明らかに文脈上、前後を読んでみても明らかで否定のしようのない、これは列記とした事実です。これはもうイエス・キリストのことを言っているんだと。

また黙示録の1章の方に戻って頂いて、さっき17節と18節を読みましたが、その前を文脈です

つと振り返って頂くと、**12 節**のところに『¹² そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。』声を見ようとしてヨハネは振り向いたわけです。で、その声の主がどんな姿をしていたのかということが、**13 節**以降にこと細かく説明されています。これがイエス・キリストの黙示です。栄光のキリストの本当の姿です。『¹³ それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。¹⁴ その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。¹⁵ その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。¹⁶ また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。』で、**17 節**で『それで私は、この方を見たとき』と続くわけです。この方とは、明らかにエホバじゃなくて、栄光のキリストだということです。天に挙げられたキリストの姿です。で、これがキリストを指すという事は、**2 章**の方を見て頂くと明らかです。**2 章**、**3 章**にそれぞれ 7 つの教会に手紙が宛てられているんですが、その手紙の冒頭に、手紙の主が自己紹介している内容が出てきます。その自己紹介している内容が実は、今読んだ黙示録の**1 章 13 節**から**16 節**に出てくる描写そのもので紹介されています。

で、ひとつこれをエホバの証人に示すわけです。黙示録**1 章 17 節**、**18 節**では、もう彼らは行き詰まってしまうわけです。エホバが死んだのかと。

で、黙示録**2 章 8 節**では『また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。』ここにも出てきたわけです。「死んで、また生きた方」どう考えてもこれはイエス・キリスト以外に他には該当者がいないということになるわけです。エホバが死んで、また生きたなんていう話はどこにもないと。そして皆さんは参考までにそれぞれ 7 つの教会に宛てられているタイトル、例えば**2 章 1 節**のところにはエペソの教会に対して『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方』これは黙示録**1 章 13 節**以降に出てきた栄光のキリストの描写ということは分かっていると思います。そういうことが 7 つに分けてイエス・キリストが自己紹介をして手紙を綴って書き送っているわけです。

そして黙示録**22 : 16**。これは彼らに示す箇所ではないんですが、皆さんは参考までに押さえておいてください。『「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」』と。ですから諸教会、7 つの教会に手紙を宛てたのは、イエス・キリストご自身です。手紙の主、これはイエス・キリストであります。声の主、それはイエス・キリストであるということです。その方が「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。」とおっしゃっているわけです。

でも、イザヤ書を読むと「私は初めであり終りである。」まあそれはギリシャ語ではアルファ、オメガですけれど、ヘブル語ではアレフ、タールです。日本語では“あ”、“ん”の最初と最後の文字です。で、最初であり最後であると。これはもうイザヤ書によれば、エホバを指すと、父なる神を指すとしか、言われないわけですが、でも黙示録を読むとこれはイエス・キリストを指すとしか言いようがないわけです。で、そこで彼らの中では混乱が生じています。ドキドキしているわけです。どうしよう、どうしようと。自分たちもその矛盾に気が始めるわけです。

で、別の箇所に今度は移ります。第一ヨハネ**5 : 20**。『しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。』新改訳聖書を読む限り、「この方こそ（すなわちイエス・キリストこそ）、まことの神、永遠のいのちです。」と明言されています。イエスはまことの神だと。

で、新世界訳聖書の訳はどうなっているかといいますと第一ヨハネ**5 : 20**は「**しかしわたしたちは、神の**

み子が来て、真実な方について知ることができるよう、わたしたちに知的な能力を与えてくださったことを知っています。そしてわたしたちは、み子イエス・キリストによって、真実な方と結ばれています。この方こそまことの神であり、永遠の命です。」うまいことイエスがまことの神でないように、区別されたもののだとして、敢えて真実な方というのをエホバと見立てたいわけです。そしてイエス・キリストとは切り離しております。

ただ、ここは当然ギリシャ語で書かれていますので、ギリシャ語の本当に語順通りの逐語訳ですと、日本語としてはちょっとまともな文章になりませんが、実際にはこうなっています。「**そして私はいます、内に、真実な方の内に、御子イエス・キリストの。**」というそういう語順でありまして、真実な方がエホバだと訳す事はとてもできないものです。真実な方はイエス・キリストとしか訳しようのない、実は原文となっております。ですから、「**結ばれていません**」なんて事は一切書いてありません。ですから、この方というのは、エホバではなくて、この方はイエス・キリストで、イエス・キリストこそまことの神であり、永遠のいのちであると。まあ、それがギリシャ語に忠実な訳ということです。エホバの証人も「新世界訳聖書こそがギリシャ語に最も忠実な聖書だ。」と主張するわけですが、そうではないということも皆さんは知って頂きたいと思います。もちろんそういった話を皆さんは専門的にすることは難しいと思うので、今読んだ**第一ヨハネ 5：20**、「新改訳聖書にはそのように訳されていますよ。」と、それだけでいいと思います。厳密にギリシャ語がどうのこうのとか、そんな事は皆さんがいちいち説明しなくてもいいと思います。ただ彼らも自分たちの聖書を持って「いや、これはエホバのことを言っているんであって、イエスではない。」と、そこでは平行線になると思います。

で、その次に持って来て頂きたいのは、**第一テモテ 3：16**です。彼らの心理状態としては、もうイザヤから**黙示録**にかけての1連の聖句で心がかき乱されています。もう既に矛盾を彼ら自身感じていますので、あまりここで畳みかけて責める必要はありません。単純に「私たちの使っている聖書では、こう書いてありますよ。」と。「あなたたちのはちょっと違いますね。」と、そういう感じでいいです。で、**第一テモテ 3：16**『**確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」**』で、この部分は新世界訳聖書ですとこのように訳しています。「*明らかなことですが、この敬虔な専心に関する神聖な奥義はまことに偉大です。すなわち、『彼は肉において明らかにされ、霊において義と宣せられ、み使いたちに現われ、諸国民の中で宣べ伝えられ、世で信じられ、栄光のうちに迎え上げられた。』*」のです。これは新改訳とほぼ変わりません。新改訳は「**キリストは肉において現われ**」とありますが、新世界訳は「*彼は肉において明らかにされ*」とあります。“*彼*”がだれを指すのかという話なんですけれども、実際に新改訳の方は*印がキリストのところを2つ付いておりまして、欄外には「異本（これは写本が異なるという意味です。）『神』」とあります。この異本と言っているのが公認本文です。マジョリティ・テキストと呼ばれるものです。で、この**第一テモテ 3章**における写本、300有る中で実際に『神』という言葉が使われていないものは8つしかありません。そのたった8つを持って、これは『神』ではなくて、『*彼*』若しくは『**キリスト**』だと。その立場が新改訳なり、新共同訳なり、口語訳なり、あるいはエホバの証人の新世界訳というものであります。300の内々のたった8つしかないんです。ですからあとの292は全部『神』というふうに写本はなっているわけです。『**神が肉において現れた**』と。それはもう、イエス・キリストが神だということをこれ以上明確に立証する聖句はないと言うぐらいハッキリしているわけです。でも、「**キリストは肉において現われ**」とすれば、或いは『*彼*』としてしまえば、キリストは神でなくてもいいわけです。御使いでも「**肉において現われ**」で通用してしまうわけです。でも、神だった場合は、これは困るわけです。神が人の姿をとって来られたと。で、新改訳と新世界訳はこの点ではほとんど変わりません。ただ、キリストを神と信じている私たちにとっては、**第一テモテ 3：16**はもちろん有意義な聖句であります

けれども、ただこの「キリスト」を御使いとしか考えていないエホバの証人にとっては、こういう訳は問題になってくるわけです。

で、次にテトス 2:13。『祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。』ここはもう読めば、イエスが大いなる神だとハッキリ言われている箇所として、私たちは素直に理解できるわけです。その一方で、新世界訳聖書はどのように訳しているかと言いますとテトス 2:13「**そしてわたしたちは、幸福な希望と、偉大な神およびわたしたちの救い主キリスト・イエスの栄光ある顕現とを待っているのです。**」“偉大な神および”ということは、別物として「**わたしたちの救い主キリスト・イエスの栄光ある顕現とを待っているのです。**」と。“および”という言葉。英語で言えば“and”です。そういう接続詞をそこに加えているわけです。これによって“偉大な神”はエホバであって、イエスは偉大な神ではないという解釈になっていくんですけども。でも、これもギリシャ語の文法を正しく知っていれば、そのような訳は無理がある、誤っているということになるわけです。で、そのギリシャ語の文法のルールというものがどういうものかと言いますと、グランビルシャープの法則というものです。これも覚えなくていいですけども。どういうものかと言いますと、今読んだところだと、“大いなる神”というところにはギリシャ語には定冠詞がついています。英語では“the”にあたるものです。ギリシャ語では“ho”と言います。で、「その大いなる神」というのが直訳です。その後には“キリスト・イエス”と続くんですけども、“その”というものが付いていますので、その場合はギリシャ語の文法ですと“大いなる神”＝“キリスト・イエス”というふうに解されるルールがあるわけです。2つの名詞が、“大いなる神”と“キリスト・イエス”という2つの名詞が接続詞で「～と」、英語で言う“and”で接続されている時、その前に定冠詞が付くと、“その”という定冠詞が付くと、“大いなる神”＝“キリスト・イエス”という訳が文法のルールで成立するわけです。ですから、そういう文法上のルールがあって新改訳は「大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエス」というふうに訳しているわけです。でも、このグランビルシャープの法則というのは、そこかしこに出てきます。ですから、これを彼らは当然知っていながらも敢えて無視して、この文法の法則を無視して、単純に“および”というふうに区分けしてしまっただけで、“大いなる神”＝“キリスト・イエス”とはしないで、“大いなる神”“および”（“”と“という意味で使って）それをエホバと見なして、イエス・キリストはもう神ではないということを主張したいばかりに、このグランビルシャープの法則も無視して、彼らは訳してしまっています。で、この法則についてはまた他の箇所にも多用されていると言いましたので、これも参考までに聞いてください。第二テサロニケ 1:12。これは皆さんが押さえておいて頂きたいもので、エホバの証人の人々にはここまでの話は、私は聞かれない限りはしません。『それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。』これもグランビルシャープの法則が使われています。2つの名詞が、英語で言うところの“and”で接続されている時に定冠詞が付いていれば、それは同一のものを指している。ですから、“私たちの神”＝“イエス・キリスト”であるという理解で、新改訳は「**私たちの神であり主であるイエス・キリスト**」と、そう訳しています。で、その一方で新世界訳聖書はその文法のルールを、グランビルシャープの法則を全く無視して先ほどと同じように分けてしまっただけで、イエスを是が非でも神にしたいわけなんです。このように訳しています。第二テサロニケ 1:12。「**それは、わたしたちの神および主イエス・キリストの過分のご親切にしたがって**（そこは恵みという言葉ですから良い訳です。）、**わたしたちの主イエスの名があなたの方で栄光を受け、またあなた方も彼との結びつきのもとに栄光を受けるためです。**」ですから、完全に“わたしたちの神”は、これはエホバと理解して、“および”“主イエス・キリストの、と。ただ普通に考えても父なる神、全能の神エホバと御使いに過ぎないイエスが併記されて、並列扱いで、この両者の恵みによってということも、普通に考えたらこれはエホバなる神には失礼にあたる。創造主と被

造物が列記されて、その両者から恵みが及ぶように、なんていうそういう表現は、そもそもエホバなる神には失敬ではないかと。神と被造物を並べて書くこと自体が、既に不敬であるというふうに私は自然にそう思うんですけれども、彼らにとっては兎に角「イエスがエホバであっては困る。イエスが神であっては困る。」ということなので、そういうことは深く考えないわけです。とりあえず” および “という言葉で切ってしまうと。そういう短絡的な訳が見て取れます。

でも、残念なことに今読んだところは、口語訳聖書、新共同訳聖書は、実は新世界訳聖書と全く同じように訳しています。口語訳と新共同訳は『私たちの神と主イエス・キリストとの恵みによって』と。完全に“私たちの神”と“主イエス・キリスト”との恵みによって』と完全に切ってしまうと。ですから、新改訳はここでは正しいです。でも、新共同訳聖書と口語訳聖書は矛盾しています。そして、一貫した訳をとっていません。このグランビルシャープの法則を一貫して適用していないということです。

で、“神”の前に定冠詞“その(the)”が付いて、そして「主でありキリストの」の“主”というところに冠詞が付いていません。無冠詞ということです。こういうグランビルシャープの法則、これはもうそこかしこにあると言いましたので、もう一箇所だけ**第二ペテロ 1:1**『イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。』新世界訳聖書はそこをこう訳しています。「*イエス・キリストの奴隷また使徒であるシモン・ペテロから、わたしたちの神と救い主イエス・キリストの義により、わたしたちと同じ特権としての信仰を得ている人々へ*」と。で、口語訳も、新共同訳聖書も「私たちの神と救い主イエス・キリスト」新世界訳と同じように訳しています。残念です。

で、もう一箇所だけ、**ローマ 9:5**も同じラインでお話します。グランビルシャープの法則。こちらも有名な箇所です。イエスが神だという宣言です。『父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上におられ、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。』“キリストはとこしえにほめたたえられる神だ”と、ハッキリそう書いてあります。新世界訳ではどう訳しているかと言いますと**ローマ 9:5**「*父祖たちは彼らに属し、キリストも、肉によれば、彼らから出たのです。すべてのものの上におられる神が永久にほめたたえられますように。アーメン。*」と。イエスが神ではないということです。で、ここは口語訳聖書では『肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上におられる神は、永遠にほむべきかな、アーメン。』新共同訳では『キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。』辛うじて新共同訳はここでは、イエスがほめたたえられる神だというふうに訳していますので、グランビルシャープの法則に従っています。でも、口語訳は完全に間違っています。新世界訳と口語訳は同じように訳しています。あくまでエホバの証人は、「エホバだけが神であって、イエスは神ではありえない。」と。でも、ギリシャ語の文法のルール、グランビルシャープの法則では、二つの名詞がちょうど接続詞（英語で言うところの”and”。日本語で言えば“～と”とか“および”という言葉）で接続されている場合、定冠詞が最初の名詞に付いて次の名詞には無冠詞の場合、それは同一のものを指すと、そういうルールがあるわけです。別々にならないということです。別個のものに区別されることはないというルールです。で、そういうグランビルシャープの法則がそこかしこにありますので、これはルールですので、例外はなく一定のものとして、イエス・キリストの神性を表す際によく使われているものです。で、その辺りはあまり話し出すと彼らは逃げていきますので、皆さんは知識としてただ得ておいて頂きたいと思います。で、話をまた**テトス 2:13**から展開しましたので、そこでグランビルシャープの法則ということを紹介しました。それが13番目に彼らに伝える聖句だったわけです。

で、14番目はヨハネの福音書**8:58**。『イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。』この言葉は『聖書66巻の中のイエス・キリスト』ということで皆さんにも解説しました。アブラハムはイエスが生まれる2000年も前の人です。

その2000年も前のアブラハムよりもさらに前からイエスは存在すると言っているわけです。『わたしはいる』というところは*印が付いておりまして、ここは実は“エゴ・エイミー”という言葉が使われています。ギリシャ語では“エゴ・エイミー”、「わたしはあるというものである。」ヘブル語の「エフィエ・アシェル・エフィエ」のギリシャ語訳が使われています。「アブラハムが生まれる前から、わたしはあるというものである。」と。それではちょっと分からない表現なので、「わたしはいるのです。」と。これは明らかにイエスのヤーウェ宣言であると。イエスが自らを「聖書の神だ。」と宣言したわけです。だからこそ59節に『すると彼らは（ユダヤ人たちは）石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。』石を取って投げつけるという行為は、イエスが自らを神として、神を冒瀆したと彼らがそう考えたからです。そうでなければ石打ちの刑で殺すなんていうことはまずないです。ですからユダヤ人にとってはこのヨハネ8:58の言葉は明らかなるヤーウェ宣言だと。私たちが言えば、イエスは自ら神だと宣言されたというふうに捉えることが出来ます。新世界訳はこう訳しています。「*イエスは彼らに言われた、「きわめて真実にあなた方に言いますが、アブラハムが存在する前からわたしはいるのです。」*」新改訳とあまり変わらない訳です。「わたしはいるのです」と。「どういうことですか。説明してください。」と。「2000年前の時代からイエスがいます。」とはどういう事ですかと。「*それはイエスは御使いだからですよ。」*と、「*御使いが人の姿をとった。ただそれだけです。アブラハムにも御使いが現れたじゃないですか。*」その通りです。そこからやばいことになるわけです。と言うのは、その御使いの1人は神と呼ばれているからです。“主の使い”、ヤーウェの使いですね。それは創世記の中に度々出てきますので、それも話が彼らと出来るところです。聖書を使って実際に御使いと呼ばれているものが、“主の使い”というもの、要するにエホバの使い、それが実はエホバご自身だと。神ご自身だということを創世記からも教えることができます。

でも、ここではそこに飛ばないで、ヨハネ8:24にさらに進んでいきます。『それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。』新世界訳聖書は、そこでは「*それゆえわたしは、あなた方は自分の罪のうちに死ぬと言ったのです。わたしがその者であることを信じないなら、あなた方は自分の罪のうちに死ぬことになるのです。*」新改訳の方では『わたしのこと』というところに*印がついていて、直訳『わたしがある』ということを出エジプト記3:14と関連させてキリストが主なる神であることを言われたと解する者が多い。と言うよりも、それしか解しようがないんです。“エゴ・エイミー”が使われているからです。もしあなたがたが“エゴ・エイミー”であるイエスを信じなければ、自分の罪の中で死んでしまうんだと。これはえらいことです。ですから、イエスが“エゴ・エイミー”なる方、イエスがヤーウェ、エホバということ信じなければ、自分の罪の中で死ぬんだと、そうイエスがおっしゃっているわけです。

そして最後にヨハネ10:25を彼らと一緒に開きます。少し長いですがけれども、最後は25~39節までじっくり読みます。『²⁵ イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。」（これを目の前で言うわけです。）わたしが父の御名によって行なうわざが、わたしについて証言しています。²⁶ しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。²⁷ わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。²⁸ わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。²⁹ わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。³⁰ わたしと父とは一つです。」（一つというのは*印が付いていて、欄外に「同一の本質」とあります。ギリシャ語で“hen”という言葉なんです、同一の本質。父と子は同一の性質を持った方。ですからただの御使いではないと

ということです。父と子は区別されるべきものですけれども、でも同質のものです。) ³¹ ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。(このリアクションからしてイエスが自らを神とみなしたということ、神宣言、ヤーウェ宣言されたということは明らかです。) ³¹ イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」 ³² ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」(ここでハッキリとユダヤ人がそう言ってくれているわけです。ユダヤ人だったら、イエスが自らを神としたということはもう明らかです。でも、エホバの証人はこれをあやふやにしようとするわけです。「**イエスは神と言った事はないんだと。自らイエスが神だと言った箇所は、聖書には書いてないと。**」そう頑なに主張します。でも、イエスは確かに言っているんです。で、『わたしと父とは一つですと。』これも彼らは苦しい言い訳をするんですが、「**ここに書かれている通りイエスはそのわざにおいて父なる神と同質であると。わざだけであって、その存在そのものが父と同質ではないと。わざに限った話であって、存在そのものが父と同質であると。同一の本質だということではないと。**」そういう苦しい言い訳をするんですけれども、そんなものはすべて払拭されます。今読んで字の如く、ユダヤ人たちはそれを聞いて、イエスはわざにおいて神と一つにしているのではなくて、存在において「**自分は神だ。**」と言っているわけです。ですからこれは、もう素直に文を読めば分かることです。曲解するからこそ、ねじれた見方をするからこそ、のようにひねくれた解釈をせざるを得なくなるだけであって、もう素直に読めば、これはイエスは自分のことを神だと言ったんだなど、それしか解釈のしようがないわけです。) ³⁴ イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。 ³⁵ もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、 ³⁶ 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。 ³⁷ もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでいなさい。 ³⁸ しかし、もし行っているなら、たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」 ³⁹ そこで、彼らはまたイエスを捕えようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。』ここでは単純にもうイエスが神だと宣言されたので、ユダヤ人たちは激怒して「これは神への冒瀆だ。」と、何度となくイエスをその場で処刑しようとしたというそういう内容です。

で、ちなみにヨハネの福音書、これで最後エホバの証人の人に考えさせて、さよならするわけですが、まあ、彼らは自分たちなりの教理を証明して、そして従来からある伝統的な三位一体の神観というのを真っ向から否定するために、いろいろな反証のアプローチをしてきます。逆に三位一体が矛盾しているんだというようなことを反対に証明しようとする、反証しようとするわけですが、今読んだところにも勿論彼らなりの解釈があるわけです。

で、今ヨハネ 1:1 に戻って頂いて『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』この部分、これはもうヨハネの福音書の冒頭から、イエスが神だということを宣言して始めているんですけれども、ここからエホバの証人は否定していかなければいけないわけです。新世界訳では「**初めに言葉があり、言葉は神と共にあり、言葉は神であった。**」と。まあ、似たような訳なんですけれども、ただ新世界訳聖書では「**言葉は神と共にあり**」の“神”というところには下に下線が引かれています。これは日本語の訳ですが、そして「**言葉は神であった。**」の“神”の方は何も引かれていません。これは何の違いかと言いますと、下線が引かれている“神”というのは、これは定冠詞がギリシャ語では付いているもの。で、下線が引かれていない“神”は無冠詞のもの、定冠詞が付いていないものです。定冠詞が付いていない無冠詞の“神”というのを、(エホバの証人の元々の新世界訳聖書は英語で書かれていま

す。英語を日本語に訳したわけですが、) その英語の方では”a god”となっています。冠詞の”a”という言葉です。定冠詞の”the”じゃなくて冠詞の”a”が付いています。ですから、これは”the god”じゃなくて、”a god”ですね、“ひとりの神”ということです。だから、これは明らかに“言葉”というのは、“イエス”だということは文脈上否定出来ない事実なので、“言葉はイエスだ”ということは否定しないんです。でも、言葉は神だとハッキリ書かれてしまっているの、これは困るわけです。で、彼らはこれを”a god”と、“ひとりの神”というふうなことを言うわけです。でも、さっきも冒頭で言った通り、神はお一人だと。なのに”a god”というのが存在するんだというふうに彼らは言うわけです。まあ、エホバの証人によれば、冠詞の付いている god、ギリシャ語では”ho theos”と言いますけれども、この”ho theos”の場合は全能の神エホバを指すと。ですから、「**初めに言葉があり、言葉は神**（これは”ho theos”なので、全能なる神エホバ）**と共に**（いたんです。言葉は、イエスは、全能なる神エホバと共にいたと。）、**言葉は神であった。**」の神の方は、これは無冠詞なので、冠詞が付いていない。[でも英語の聖書では”a”という冠詞を付けてしまっているわけですが、] 冠詞が付いていないので、これはエホバではないと。で、彼らはひとつの神、若しくはこの言葉には神性を備えていたと。神様っぽかったと、そういう意味で彼らは解釈するわけです。でも、あくまで言葉=神ではないと。ひとりの神、神様っぽいという矛盾した良く分からない、訳の分からないという解釈になります。言葉は神のように強力であった、というふうに彼らの文書には載せられています。でも、どうしても神としては認めたくないわけです。

もし、冠詞の付いていない神というのがひとつの神を表すとすれば、単に神様っぽい、単に神の神性を備えていたとか、或いは神のように強力な存在だったというようなエホバの証人の理解として進めてしまいますと、ヨハネの福音書の中には全能なる神・エホバ神を意味する”theos”というギリシャ語に冠詞の付いていないものがそこかしこにあるんです。例えばすぐ 1 章のところ、1 章 6 節を見て下さい。『**神から遣わされたヨハネという人が現われた。**』この“神”というのは誰ですか。当然彼らは、エホバと言います。で、実際に新世界訳もヨハネ 1:6 は「**神の代理者として遣わされた人が現われた。その名はヨハネといった。**」で、その『**神の代理者**』の“**神**”というところには下線が付いています。下線が付いているから、これはエホバの神だというのが彼らの主張ですけれども。しかし、実際のところ原文には、この“神”ギリシャ語の”theos”という言葉には冠詞が付いていません。無冠詞です。無冠詞だから、じゃあこれは神ではないのか。エホバじゃないのかという話になってしまうわけです。

で、ヨハネ 1 章 12 節。『**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。**』新世界訳も「**しかし、彼を迎えた者、そうした者たちすべてに対しては、神の子供**（その“神”には下線が引いてあります。）**となる権限を与えたのである。その者たちが、彼の名に信仰を働かせていたからである。**」“**神**”に下線が付いているのでエホバと解するというのが彼らの主張ですけれども、しかし原文には『**神の子供**』の“**神**”には冠詞が付いていません。無冠詞です。で、無冠詞だとエホバの証人の考えでは、「これはエホバではない。」という話になってしまうわけです。どんどん矛盾していくわけです。

13 節にも『**この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。**』この“神”という言葉にも無冠詞、冠詞が付いていません。しかし、新世界訳には『**彼らは、血から、肉的な意志から、また人の意志から生まれたのではなく、神から生まれたのである。**』勝手に下線が付けられて“エホバ”と便宜上そのように分けられています。これは明らかなる改ざんです。無冠詞です。

で、18 節、これは極めつけです。『**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。**』神を見た者はいない。これは当然父なる神だと。で、ひとり子の神、これは当然イエス・キリストであると。普通に読めばそうなんですが、エホバの証人は、新世界訳

聖書では「いまだ神を見た人はいない。(の“神”には下線が付いています。) 父に対してその懐の位置にいる独り子の神こそ、彼について説明したのである。」その『独り子の神』イエスを指すその神の方は、下線が付いていません。1章1節と全く同じような使い分けをしているんですが、でも原文によれば1章18節は、最初の『かつて神を見た者はいない』の“神”にも冠詞は付いていませんし、『ひとり子の神』というところにも冠詞は付いていません。両方共神に対しては無冠詞という形です。

そういった明らかにこれはエホバを指すに違いないという神“theos”に冠詞が付いていないというのは、ヨハネの福音書だけでも16ヶ所あります。1章に特にたくさん出てきます。全体的に16ヶ所もあるんです。ですから、無冠詞は全部、これはエホバではないとすると、これは解釈に行き詰まるわけです。でも、1章1節にはそれを当てはめようとするわけです。どうしても“言葉”は神と認めたくないからです。

逆にヨハネの福音書20:28を見てください。『トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」』これも明らかに「イエスが主なる神だ。」という明確なイエスの神性を表す聖句かと思えます。しかし、エホバの証人の新世界訳聖書では、このヨハネ20:28はこう訳しています。「それに答えてトマスは彼に言った、「わたしの主、そしてわたしの神！」“わたしの主”そこには下線が付いています。もしこの主が、ギリシャ語では“kurios”（クーリオス）ですけれども、本来“kurios”はエホバの証人は、“エホバ”と訳しているわけです。でもここでは“主”と訳しています。「わたしのエホバ」とはイエスに対しては言えないからです。だから“主”としているんです。で、“わたしの神!”のところには下線が付いてしまっているわけです。下線が付いているということは、これは冠詞の付いた神ですから、エホバの神ということなんですけれども、これはエホバの証人の聖書でもさすがにイエスが神だと言われているそういう箇所なのかと思うかもしれませんが、彼らの解釈によれば「イエスはただの主人。」ですから、“わたしの主”となっています。そして、イエスから目を離して「わたしの神!」とただどこかに向かって叫びましたという、そういう理解です。ですからもう何が何でもとにかくイエスが神だということを否定したいわけです。ですからビックリマークが“神”の後に付いているわけです。もう全く一貫していない、こじつけとしか言いようのない言葉です。イエスが神と呼ばれる時に、ちゃんと定冠詞が付いているんです。“ho theos”と。これはもう明らかにイエスがヤーウェであると。聖書の神だということを主張している言葉なんです。エホバの証人はどうしても、是が非でもイエスを神として否定したいわけです。これが異端の特徴であり、これがサタンのライフワークと言っていると思います。

まあ、それでまたヨハネ1:1に話を戻したいと思うんですけれども、1章1節の『ことばは神であった。』と。そこがどうして無冠詞なのかと。定冠詞が付いていないのかと。もしその前の『ことばは神とともにあった。』の神と同じように、その後の『ことばは神であった。』に冠詞が付いていたら、両方共に冠詞が付いていたら、その場合は同じ神を指しているという理解になります。でも、前者の方には定冠詞が付いていて、後者の方には定冠詞がついていない、無冠詞の場合は、前者と後者は別ものだとすることを指すわけです。同じ神でも、区別されるべき神だという表現です。だからわざわざ1章1節では冠詞がついている神と無冠詞の神というのが使い分けられていて、それは私たちの理解からするとナチュラルであります。というのは父なる神と子なる神イエス・キリストは別ものだからです。でも、父と子は一つであって同一の本質を持つもの。でも、別に存在するものです。これは人間の理性を超えていますけれども、ことばは父なる神とともにあった。そして、そのことばは子なる神でもあったということです。これを言いたいがためにわざわざ定冠詞を付けた神が父を指して、無冠詞の神がことばであるお方イエスを指すというふうにヨハネは使い分けているわけです。ですから、それは聖書を文字通り読んでいけば、三位一体という言葉こそ見られませんが、でも父が神であり、子なる御子が、神の子がやはり神であり、また聖霊も神であるということはどうしたって聖書を字義通り読んで行くとそのような理解に繋がって行くわけです。ただ、3人神がいるかと言ったら、否神はただお一人だと聖書はそうも言っているわけです。そこに矛盾

を感じてエホバの証人はどうしても納得がいかない。神はただひとりだから、絶対に三位一体なんてものはあり得ないと。そこを強く主張するんですけども、彼らが言うには $1 + 1 + 1 = 3$ ではないかと。だから神は3人だと主張する従来のキリスト教というのは、これは聖書の言葉に抵触する。神はただおひとりだと言われているその言葉に抵触するんだと。

しかし、マルコの福音書 10 : 7~8 を見て頂くと『⁷それゆえ、人はその父と母を離れ、⁸ふたりは一体となるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。』 $1 + 1 = 2$ です。でも、ここでは $1 + 1 = 1$ だと言われているわけです。もはやふたりではなくひとりだと。神によって結ばれた夫婦は、神の目にはひとりなんです。でも、エホバの証人は人間の論理で $1 + 1 + 1 = 3$ であって、神は3人いないから三位一体は間違っている。でも、神の論理で言うと、神の計算で行くと、 $1 + 1 + 1 = 1$ なんです。或いは $1 \times 1 \times 1 = 1$ と言っても良いかもしれませんが、でもそもそも神を数字に置き換えること自体が私からするととんでもない冒涇だと思います。神はただの数字の1だという考えです。強いて言えば神は無限なるお方ですから、 $\infty + \infty + \infty = \infty$ です。ですから $1 + 1 + 1$ なんていうそういう考えを持ってくる事自体、もう神への冒涇だと私はそう伝えるんですけども、彼らは必ず持ってきます。「 **$1 + 1 + 1 = 3$ じゃないですかと。**」神は1じゃないです。永遠なるお方です。無限なるお方です。ですから、「 $\infty + \infty + \infty$ どうですか。それは3じゃないですね。」と、そう答えるわけですが。

申命記 6 : 4、これも皆さん知っていると思います。ここは聖書の中で最も大切な言葉ですからエホバの証人も当然のことながら最も大切にしている聖句であるはずです。『聞きなさい。イスラエル。(シエマ イスラエル。シエマの朗誦というところです。) 主は私たちの神。主はただひとりである。』主というのは太字の主ですから、『ヤーウェは私たちの神。ヤーウェはただひとりである。』と。これも新世界訳聖書で読みますと、こうあります。申命記 6 : 4「**イスラエルよ、聞きなさい。わたしたちの神エホバはただひとりのエホバである。**」だから彼らは、「**唯一神はエホバである。**」と主張するんですが、この“神”という言葉は“elohiym” (エロヒーム) という言葉です。ヘブル語で“エロヒーム”。“エロヒーム”というのは“神”の複数形です。なのに、ひとりだと言っているわけです。矛盾しています。単数形は“エル”です。神がひとりの場合は“エル”という言葉でヘブル語で使います。で、複数形というものには、ヘブル語には二つ以上、双数形というかたちがあります。英語では dual と言います。singular と dual。そして plural (複数形)。3つあるわけです。ですから、ひとりの場合は a god、それは“エル”という言葉。gods の場合、ふたりという場合、これはヘブル語にある双数形で、ふたり以上ということですけども、その場合は“エラ”。で、3人以上の複数形というのが“エロヒーム”です。ですから、少なくとも“エロヒーム”というのは、神が3者おられるわけです。3者以上です。でも、その神は、ヤーウェと呼ばれる“エロヒーム”は、ただひとりであると。この“ひとり”というのはヘブル語では複合的1を表す言葉です。“echad” (エハッドゥ) という言葉です。“エハッドゥ”これはさっき読んだ夫婦の制定がなされる、アダムとエバの箇所にあったその言葉と全く同じです。人はその父と母をはなれて、その妻と結ばれ、ふたりの者は一心同体となるという、その“一つになる”という言葉です。一心同体と訳されている言葉はやはり“エハッドゥ”であります。複合的1ということです。 $1 + 1 = 2$ じゃなくて、 $1 + 1 = 1$ というふうに神が見ている箇所です。で、神に関しても同じなんです。3ある神ですけども、この方は1であると。3つにして一つの神。ですから、ここでは“エロヒーム”と、そして“エハッドゥ”という言葉が使われていますので、3人以上いる、3者以上いる神がひとりの神であると。たったひとりの、数字的な絶対的な1を表したければ、別のヘブル語があるわけです。“ヤッヒール”という言葉が絶対的1を表す言葉ですから、ただ数値の1だけを表したければ、“ヤッヒール”を使えばいいわけです。でも、敢えて“エハッドゥ”を使っているということは、複数あるものが一つとなっているという複合的1と。これは卵に使う言葉だとも言いました。卵の殻と白身と黄身、それぞれ3つあってもそれが一つの卵であると。そういう時に使うのが

“エハッドゥ”という言葉です。

で、話を戻したいと思いますが、エホバの証人は是が非でも三位一体のその教理を否定したいので、イエスが神であることを否定したいので、一生懸命いろんな解釈を持ってきます。で、その集大成が新世界訳聖書というものでありますけれども、その他にも彼らはいろんな独自の解釈を持ったテキストを作っているわけです。そういうものに彼らはマインド・コントロールされてしまっていますので、なかなかそのマインド・コントロールを解くということは難しいかもしれません。でも、彼らの聖書の中にも明らかに矛盾点がありますので、そういうところを突いてあげると彼らは考え始めます。説明が出来ないし、説明に無理がある、矛盾があるということを彼らも考え始めますので、「私はクリスチャンですから、あなたたちとは違います。」と言っても、彼らも自分たちはクリスチャンだと言いますから、そういうことでは通用しないわけです。で、彼らの言うところによれば、いわゆるクリスチャンと名乗る人たちは愛がないと。自分たちを門前払いするし、話も聞いてくれないんだと。見下げて切り捨てるようなそのような態度をとると。愛だの何だのと言いながらも、門前払いするような人たちに果たして愛があるだろうかと。うまいことを言われて、言葉に私たちが窮するかもしれませんが、本当に愛があれば私たちが彼らに「本当の神を知って欲しい。本当に救われて欲しい。」と願うはずなので、門前払いは忙しい時には困ると思うので、またいつか別の機会に来て下さいとか、又は皆さんを歓迎する教会がありますので是非そちらへお越し下さいと言って、この教会のことを伝えて欲しいと思います。勿論彼らは知っていますけれども。長野のエホバの証人であれば知っていますが、でもそういう思いも寄らないような言葉をかけられると彼らはちょっと戸惑うんです。大抵のいわゆるクリスチャンを名乗っているプロテスタントの家庭であれば、もう異端ということで烙印を押してしまって、まったくもう話すらしない。目も合わせようとしないうし、全く愛なんて言葉は感じられないような切り捨てられ方をしますので、下手に勿論家の中に上げてしまっしつこく勧誘されたり、そこから自分自身が惑わされるようなそんなことになってしまっしつ元も子もないわけですがけれども、ですから聖書の知識を普段から皆さんも持って頂いて、本物を知っているということを皆さんも自負しているのであれば、彼ら以上に聖書を学ぶ必要があると思います。彼らよりもっと聖書を知らなければいけないわけです。で、その中でハッキリとイエスがキリストである、イエスが神であるということを皆さんが立証できなければ、まず彼らに何も伝えることは出来ないということなので、そこから始めて頂きたいと思います。

で、もう少しだけ最後イエスについて話したいと思いますが、**使徒 20 : 28**のところですか。『あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。』私たちはこれを何も違和感なくすんなりと読むと思うんですが、新世界訳聖書ですと次のように訳されています。「**あなた方自身と群れのすべてに注意を払いなさい。神がご自身のみ子の血をもって買い取られた神の会衆を牧させるため、聖霊があなた方をその群れの中に監督として任命したのです。**」新世界訳には「**神がご自身のみ子の血をもって買い取られた神の会衆を牧させる**」とあります。“み子”という言葉が加わっています。これは口語訳聖書も同じです。口語訳では『聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を』。新共同訳聖書も『聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会』と訳しています。でも、原文にはどこにも“御子”という言葉は使われていません。“御子”という言葉は補足です。ただ付け加えただけです。聖書に付け加えているんです。これは大変な問題だと思います。ですから、新世界訳も、口語訳も、新共同訳も共通しているのは、血を流したのは御子であるとして、明らかに神とは区別しているわけです。でも、新改訳は字義通り素直に訳して、血を流したのは神だと。で、勿論その神というのはイエスだということはお分かりだと思います。気を付けたいと思います。

で、ヘブル 1 : 8~9。『**8**御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あな

たの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。⁹あなたは義を愛し、不正を憎まれます。それゆえ、神よ。あなたの神は、あふれるばかりの喜びの油を、あなたとともに立つ者にまして、あなたに注ぎなさいました。』御子に関して、御子について、イエスについて「神よ。」と呼びかけがあります。これもイエスが神だと呼ばれているパワフルな箇所です。その一方でエホバの証人の新世界訳聖書はヘブル 1:8~9 をこのように訳しています。「⁸しかしみ子についてはこうです。「神は限りなく永久にあなたの王座、あなたの王国の笏は廉直の笏である。⁹あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それゆえに、神、あなたの神は、歡喜の油をあなたの仲間に勝ってあなたにそそがれた。」」⁸み子についてはこうです。「神は限りなく永久にあなたの王座」と訳しています。「神よ。」という呼びかけの告白ではなくて、“神は”というふうに主格になっています。で、これは結論から言うと詩篇 45:6~7 からの引用で、ヘブル語の方も「神よ。」という呼びかけの告白になっています。ですからもうこれほどの訳を見ても主格にはなっていません。「神よ。」という呼びかけになっています。これが一番自然な訳です。でも、イエスを神と呼ぶわけにはいかないので、“神は”という主格に変えてしまっているわけです。でも、百歩譲ってこれを告白の「神よ。」という呼びかけではなくて、主格の“神は”という訳にしたとします。無理がありますけれども、不自然ですが、そうしたとします。で、そうして読んでも意味が分かりません。「神は限りなく永久にあなたの王座」どうして神が永久にあなたの王座なんですかと。エホバが永久にあなたの王座とは、どういうことですかと。まあ、そういうワケの分からない訳になりますので、こういうことが結局無理な解釈、私的解釈をすると出てきてしまうわけです。

で、続きのヘブル 1:10~12 節。『¹⁰またこう言われます。（“また”というのは勿論御子についての続きです。）「主よ。（御子が「主よ。」）あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。¹¹これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは着物のように古びます。¹²あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。』」これもカギ括弧の中でありますので、旧約聖書の詩篇 102:25 からの引用となっています。で、エホバの証人の新世界訳聖書では 10 節に「¹⁰また、「主よ、あなたは初めにこの地の基を据えられました。」「主よ」と言っているのは本来はこれがエホバだった場合はエホバと訳すわけですが、イエスなのでエホバだとは言いません。「主よ。」と。ですから明らかに御子イエス・キリストはエホバではないということを何としてでも立証したいというのが新世界訳の訳になっています。でも出典元の、引用元の詩篇 102:25 の前節 24 節を見て頂くと『私は申しました。「わが神よ。』と。ですから御子は神です。

そしてさらに詩篇 102:1 まで ^{さかのぼ} 遡りますと『主よ。私の祈りを聞いてください。』そこから始まっているわけです。太字の主です。ヤーウェから始まっています。これは誰について書かれているかと言うと、御子について書かれているわけです。ですから御子は太字の主、ヤーウェとなるわけです。当然エホバと本来なるべきところです。エホバの証人はさっきも前に言った通り、新約聖書の“主”、“クーリオス”は 237 回“エホバ”と訳しているんです。でも、ヘブル 1:10 は“エホバ”と訳さずに、“主”と訳しています。イエスをどうしてもエホバと認めたくないからです。

で、情報としましては新約聖書でイエスを神として明らかに直接的に言及している箇所は 80 ヶ所もあります。で、間接的なところを含めるともう数え切れないくらいです。間接的な表現というのは、神でしか言えないような発言をするとか。例えば「あなたの罪は赦された。」これは神しか言えないことだと言って周りのユダヤ人たちは反発したわけです。神を汚しているんだと。神しか言えないことをイエスが言ったわけです。これはイエスが間接的にご自身が神だとおっしゃったという内容です。そういうことを含めたらもうキリがないくらいイエスは自らを神ということを言っているわけです。でも、エホバの証人は「イエスは神なんて言ったことは一度もないんだ。」と、そう言うわけです。彼らの冊子に『樂園』というのが

あるんですが、そこではこう言っています。『でもイエスは聖書の中で神と呼ばれていませんか、という人もあるでしょう。それは事実です。ところがサタンも神と呼ばれているのです。第二コリント4:4。ヨハネの福音書1:1はイエスが言葉と呼ばれている箇所ですが、いくつかの聖書翻訳ではこの箇所が「はじめに言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なりき。」となっています。しかし2節には、その言葉は「はじめに神とともにあり」と述べられていることに注目して下さい。また人々はイエスを見たことがあるのに18節には「未だ神を見し者はなし。」とあります。(欽定訳) ですからいくつかの訳では1節が「言葉は神とともにあり、言葉は神性を備えていた。」若しくは「ひとつの神であった。」となっています。これはつまり言葉は強力な神のようなものであったということで原語の意味を正しく伝えていきます。(アメリカ訳) イエスが全能の神でないことは明白です。事実イエスのご自分の父のことを「わたしの神」また「唯一のまことの神」と言われました。(ヨハネ20:17、17:3)』イエスは神でないということを彼らの機関誌の中でも度々言っていて、7ポイント、イエスが神でないということを主張している点を挙げています。

イエスは「わたしは神である。」と言っていない。これは第1ポイントです。でも何度となく言っています。「わたしはあるというものである。」ヤーウェ宣言がもうこれ以上ないというものです。もし、イエスが「わたしはあるというものである。」と言わずに「わたしは、”theos”(セオス)というギリシャ語で、“神”だ。」と言ったら、それはギリシャの神々というふうにも捉えられて、偶像神となるという可能性もありますので、イエスは一切「わたしは”theos”(セオス)。」という言い方はしていないわけです。或いは“エロヒーム”というヘブル語でもそうです。これも異教の神々にも使う言葉です。日本語でも“神”と言ったら、聖書の神も言いますけれども、八百万の神々も“神”と言うわけです。でも、「わたしはあるというものである。」と言ったら、これは聖書の神以外は指さないわけです。ヤーウェしか意味しないわけです。その言葉をイエスが使ったわけです。だからユダヤ人はそれを聞いて、イエスは自らを神とすると行って、冒涇だと言って、石打にしようとしたほどです。ですから、エホバの証人は「わたしは神である。」とイエスは一度も言っていないのにおかしいというのはこれはナンセンスな話です。しかもイエスは礼拝まで受けています。神以外には礼拝を受けるべきでないことは、皆さんも承知の通りです。

で、二番目のポイントは、イエスはむしろ神の子と呼ばれている。神ではなくて神の子だから、という言い方です。でも、イエスは自分のことを神の子と言う時は、子供のギリシャ語”huios”(ヒュイオス)という言葉を使います。“ヒュイオス”という言葉は、相続権のある息子を指す言葉です。イエスを信じた者も神の子どもと呼ばれるじゃないですか、と思うかもしれませんが、私たちが神の子どもと呼ばれる時は”teknon”(テクノン)という言葉が使われます。これは完全に使い分けているんです。小さい子供たちのことを“テクノン”と言います。“ヒュイオス”というのは、これは相続権のある長男を指す言葉です。私たちに、人間には、クリスチャンには、“ヒュイオス”は使われないんです。これはイエスにのみ使われる言葉です。で、もちろん「神の子供だから神じゃない。」という言い方もおかしいです。ひとり子の神という言葉がヨハネの福音書1章に使われていましたので、しかも「わたしと父とはひとつだ。」と、同一の1だということも言っていますし、ですからこれはエホバの証人の主張は通用しないということです。

で、3つ目のポイントは、イエスは「父はわたしよりも偉大です。」と言われましたと。(ヨハネ14:28) だからイエスは神以下だと言うんですが、これはイエスが父なる神よりも劣っているという意味ではないです。イエスは神であるのに人の姿をとって敢えて劣った者となったということです。ですからヨハネ17章では、また再びご自身の栄光を取り戻すことを父に願い求めています。むしろこれを専門用語では『キリストの謙卑』と言います。キリストは神なのに人の姿となって、そしてしもべの姿で実に十字架の死にまで従って下さったというピリピ2章にある、あのキリストの謙卑のことを言います。だから、父はわたしよりも偉大ですと言うのは、地位が劣っているとか、能力が劣っているとか、そういう意味じゃないで

す。

で、4番目のエホバの証人のポイントは、**イエスは自分も御使いも知らない、神のみが知っていることがある、と言った**。これも謙卑の領域です。その日その時がいつなのか、父なる神だけがご存知だと。イエスは本当に知らなかったかと言ったらそうじゃないですね。

で、5番目は、**イエスが全能の神であるなら神に祈るといふようなことはしなかったはずであると**。これは祈るということを全く履き違えています。祈りはただの物をねだる事ではないです。劣っているから上位の者に願い求めていると。祈りはコミュニケーションです。祈りは神との会話であります。ですからエホバの証人は祈りというものを全く理解できていない人たちです。当然と言えば当然です。イエスを信じていない以上、神と祈りを通して交わる事は本当は出来ないからです。

で、6番目は、**神はこのイエスを復活させたと述べて(使徒2:32) 聖書は全能の神とイエスを別々の2人としている**。区別しているのは確かです。でも、エホバの証人は区別すればイエスは神でなくなるとそう思ってますが、イエスは子なる神、三位一体の第二位格として区別されるべきものですが、区別されたからといって神でなくなるというのは、暴論であります。イエスは確かに神なんです。でも父なる神とも、聖霊なる神とも違う、全く位格の異なって、でも同時に同じ本質を持つ神、三つにして一つの神の位格のお一人だと。ですから、父なる神がイエスを復活させたともありますし、聖霊が、御霊がイエスを復活させたともありますし、イエスが自ら復活したとも書いてあるんです。そういったところを見落としています。

で、7番目に、**イエスは死に復活し昇天した後でさえも父と同等ではない。(第一コリント11:3、第一コリント15:28)**これも一つ一つ彼らは証明聖句として挙げているのも、まったくイエスが神でないということを主張するには力のない、こじつけでしかない聖句というふうになりますので、今日はこれぐらいで閉じたいと思いますけれども、イエス・キリストが神であるということは、初代教会のクリスチャンたちは、旧約聖書を使って立証したわけです。新約聖書がなくても、イエスが神であるということは旧約のみで充分立証できたという事は、これまでの学びでも皆さんにはお伝えしてきました。

例えば**イザヤ7:14**ではインマヌエルと呼ばれる方、これが約束のメシヤです。神は共におられる。で、そのインマヌエルはナザレのイエスがこの世に来られたことで成就したということは、**マタイ1章**で私たちは知っております。でも、イザヤの中では、このインマヌエルは同時に**イザヤ9:6**では力ある神とも呼ばれています。インマヌエルなる方は、嬰兒ではあるんですけれども、赤ちゃんで来ますけれども、でも力ある神でもあると。**力ある神というのはエホバの証人に言わせれば、エホバだと言うわけです**。でも、エホバはお一人です。インマヌエルと呼ばれるイエスも力ある神。ふたり神はいると最低でもそうになってしまうんです。そこで彼らは矛盾を感じるわけです。

そして**イザヤ40:3~4**のところでは、『³荒野に呼ばわる者の声とする。「主の道を整えよ。(ヤーウエの道を整えよ。) 荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。⁴すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。』この言葉は**マタイ3:1~3**に引用されています。バプテスマのヨハネにおいて成就したということになっています。で、そこによれば『¹そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。²「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」³この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声とする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』』と**言われたその人である。**』と。で、その後にバプテスマのヨハネは、その『主の道』の主とは誰なのか。『主の通られる道』の主とは誰なのか。それは**自分の後から来られる方、すなわちイエス・キリストだと言っているわけ**です。“ヤーウエの道”、それは“イエスの道”です。『**私たちの神のために**』とイザヤが言っているのは、『**イエスのために**』ということになるわけです。ですから、どう読んだってエホバの証人のように、「イエスは神ではない。」という読み方は出来ないとい

うことです。イエスは主であると。そのことを心で信じ、口で告白する者が救われるわけですが、その主というのは、やはりヤーウェです。これもローマ 10 章から明らかであります。イエスが主であるということは、イエスがヤーウェであるということを、エホバというふうにも敢えて表現しても差し支えないと思います。イエスがエホバと、心で信じて、口で告白しなければ救われないんです。エホバの証人は、エホバを信じていると言いますが、イエスがエホバだとは言いませんので、彼らは救われていないんです。彼らはクリスチャンだと自称しますが、彼らは本当の意味ではクリスチャンではありません。「主よ。主よ。」と言う者が、皆天の御国に入るのではないんです。「エホバ。エホバ。」と言っても、皆天の御国に入るのではないんです。実際に彼らは天の御国には入れないんです。14 万 4 千人しか入れないんですから、彼らはただ消えるだけです。そんな虚しい宗教に人々は取り込まれていきます。何故エホバの証人がそんなにも沢山の人の心を捉えるのか。それは皆彼らが訪問する先々は、愛されていない人たちの家だからです。誰も声をかけてくれないんです。誰でもいいんです。誰かが話しを聞いてくれたら。それで彼らが行くと歓迎されるわけです。宗教に興味がなくたって、とりあえず玄関先に来てくれて、そしていろんな話もしてくれるし、ただで読み物もくれるし、寂しい人にとってはうれしいことなんです。有り難いことなんです。ですから、もしエホバの証人の人が老人ホームか何かに行ったら大変なことになります。皆全員エホバの証人になって、輸血を受けられませんから大変な騒ぎになるかもしれませんけれども、でも気を付けて頂きたいと思います。人々は渴いています。霊的に渴いています。愛に飢え渴いています。そこをサタンがうまく利用して、いろんな家々にエホバの証人をどんどん遣わしていきます。私たちが行く前に、私たちが行かないところに、それはサタンの戦略でもあるわけです。で、一度取り込まれたら、マインド・コントロールを受けますので、中々目が開かれませんか。その頑なな心は開かれていかないわけです。注意して頂きたいと思います。

私たちも彼らとは関わりのない者、エホバの証人、モルモン教とは、統一教会とは一切関係ありませんなんてことで、もうそれで話を済ませてしまおうとか、切り捨ててしまおうということがよく行われますけれども、それはただ単に面倒くさいだけです。心の奥底を探られたら、私たちは人の魂がどうなろうとどうだっていいんです。私の時間を取らないで欲しい。面倒をかけないでもらいたい。ただそれだけです。そこは本当に神様から探られてくることだと思えます。全部負わなければいけないとは言いませんので、是非ともこの教会を紹介してあげて下さい。ここに来たらいくらでも聖書を学べると教えてあげて下さい。疑問なことがあれば、いくらでも牧仕が時間をとって話にちゃんと応じてくれると言って下さい。そういう教会があるということも是非伝えて頂いて、それだけでも良いかと思えます。個人個人、来る人来る人をすべて、エホバの証人を改心させなければいけないなんてことは、勿論言いませんので。でも、せめて彼らに本物を知らせて頂きたいと思うので、自分の口ですべて伝えられなくても、「教会というところはいつでも開かれているところで、いつでも歓迎されますよ。」と。門前払いして口も利きませんという扱いはなくて、「いつでも教会というところはどなたでも歓迎されるところで、聖書の中の本物のエホバを教えてくださいるところです。」と、そういうふうに伝えて頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。